

「保育理論書」としての『いはいやえん』

— 戦後幼年文学に見る保育観・保育思想（1） —

浅野俊和（中部学院大学人間福祉学部）

はじめに

幼年文学『いはいやえん』（福音館書店、1962年）の1編を原作とするアニメーション映画「くじらとり」のパンフレット（三鷹の森ジブリ美術館、2001年10月）には、中川李枝子と山脇百合子（旧姓・大村）への原作者インタビューが掲載され、作品の背景について触れている。その中で、中川は、主人公のしげるには実在のモデルがいることを語った後、「『いはいやえん』は私の保育理論書のつもりです」と述べていた。こうした中川の発言については、彼女のエッセイ集『本・子ども・絵本』（大和書房、1982年）の「あとがき」にも、同趣旨の文章を見いだすことができる。

中川が自身の「保育理論書」だととらえている幼年文学『いはいやえん』は、いったい、どのような保育観に立ち、どういった保育思想に支えられている作品なのであろうか。あるいは、「保育理論書」として、この文学作品を見なおした時、そこには何が浮かびあがってくるのだろうか。本発表は、こうした課題意識を持ちながら、同書を読み解いていく試みである。

1. 保母・中川李枝子と幼年文学『いはいやえん』

中川李枝子は、1935（昭和10）年9月29日に、札幌で生まれた。文学的な環境に恵まれ、1950（昭和25）年、創刊当時の「岩波少年文庫」を読んで児童文学の面白さへと夢中になり、1953（昭和28）年には、いぬいとみこらの同人誌『麦』にも参加をしている。

一方、中川は、同じ頃、東京都立高等保母学院に進学し、保育者を志す。入学後の彼女は、戦前・戦後の保育運動に関わった鈴木とくの授業も受けている。

同学院を卒業した中川は、1955（昭和30）年、無認可保育所のみどり保育園（天谷保子園長）に就職し、1970（昭和45）年の閉園まで、保母として勤めた。また、1958（昭和33）年には、いぬいらの児童文学創作グループ「いたどり」の同人にもなっている。

中川の第1作となる『いはいやえん』は、最初、同人誌『いたどりシリーズ3』の形で、1959（昭和34）年に発表された。そして、部分的な加筆・訂正が加えられ、1962（昭和37）年12月には、福音館書店から単行本が出版される。連作物語となった本書に収録されているのは、「ちゅーりっぷほいくえん」と「くじら

とり」、「ちこちゃん」、「やまのこぐちゃん」、「おおかみ」、「山のぼり」、「いはいやえん」の7編である。

「ちゅーりっぷほいくえん」を主な舞台に、主人公・しげるの巻き起こす出来事が軸となって、『いはいやえん』の各話は構成されている。特に、しげるを、旧来の童話に見られた“かわいらしい子”としては描かず、中川自身の保母としての経験を生かし、現実の子どもに基づいて設定したところが、この作品集の特色であり、最も評価を受けた点であった。

II. 『いはいやえん』を「保育理論書」として読む

『いはいやえん』の7編は、描かれている子どもをもとにして、大きく2つのグループに分けることができる。1つは、しげるを前面に立たせ、その姿を追う形で描いたエピソードであり、もう1つは、彼が登場はするものの、明らかに脇役へとまわり、他の子どもたちが主役としてとらえられていった物語である。

実際には、前者が大部分であり、後者に関しては、第2話「くじらとり」のみが該当する。その意味では、『いはいやえん』の物語において、「くじらとり」は極めて特異な位置を占めており、別立てで読み解く必要があると考えられよう。そうしたことから、まずは、それを除外した6編について取りあげていく。

「くじらとり」を除いて、第1話「ちゅーりっぷほいくえん」から第7話「いはいやえん」までの6編に共通する特徴は、しげるが、いわゆる“よい子”の姿と対置される形で描かれている点にある。それは、ファンタジーの形式ではあれ、集団生活の場所である保育所を舞台として、「自律（自立）」や「きまり（ルール）」など、幼児期の子どもの成長に関わる教育課題を、はっきりとした形で示すものになった。

まず、「ちゅーりっぷほいくえん」では、しげるが、「わすれたやくそくをおもいだす」ため、いつも「ものおき」に入れられることが語られる。しかし、魅力的な彼の存在と比べ、「やくそく」は、「徳目主義」的な項目が延々と並べられ、かなり説教がましい。

また、第3話「ちこちゃん」でも、「してはいけないこと」が描かれているけれど、そのトラブルの解決は、子どもにとって、必ずしも十分に納得がいくものとはなっていない。「徳目主義」的な項目の羅列はあ

えて避けられているものの、しげるの身に生じた現象は、「懲罰主義」的な方向を明らかにたどっている。ファンタジーの要素を取り入れ、「だれにもみえないげんこつ」や「だれにもみえない手」を登場させて、保育者による「懲罰」の描写が上手に回避されているものの、「しっぺがえし」のような出来事が続くことからすれば、「因果応報」的な物語展開となった。

なぜ、「やくそく」を守らなければならないのか。どうして、机に登ってはいけないのだろうか。しげるの姿へと自己を重ねる子どもたちに対して、両エピソードには、そうした疑問の答えが見えにくい。

さらに、第4話「やまのこぐちゃん」と第5話「おおかみ」、第6話「やまのぼり」は、それぞれ動物やおおかが登場し、ファンタジー色の強い作品となっている。しかし、「こぐちゃんは、おりこうね」という先生の言葉、あるいは、汚かった顔を洗ってさっぱりしたしげるに対して、探しているのは「そんなおりこうさんじゃないんだ」とおおかみが話したこと、「やくそく」を守れず迷子になるという物語の展開などは、「困った子」であるしげるの姿を“よい子”との対比において一層浮かびあがらせ、“よい子”であれば、子ども読者に求める効果をもたらすものと言える。

そして、書名にもなった最終話「いやいやえん」では、「いやいやえん」へ連れて行くという展開自体が、第3話「ちこちゃん」と同じく、「懲罰主義」的な側面を見せた。しかし、このエピソードは、これまでのものとは明らかに異なった2つの特徴も併せ持っている。1つは、いわゆる“よい子”が、しげるの存在に対置される形では登場していないことであり、もう1つは、以前には描いてこなかった保育者の位置づけや関わりを、ここでは明確に示している点である。

前者については、それに代わって、“困った子”ぶりを示していた彼が、「いやいやえん」における生活を通して、結末で自分自身の姿を少し省みることでできる存在へと変化させられている。自分以外の“困った子”との出会いが、しげるの「葛藤」を引き起こし、その「育ち」や「成長の節目」を浮かびあがらせているのである。また、後者については、恩師・鈴木とくをモデルとする「おばあさん」先生が、“困った子”のしげるに関わるけれど、その指導は、「ちゅーりっぷはいくえん」とは明らかに異なり、子どもたちに対して、直接的な「指示」を与えたり、「禁止」をしたというものではない。しかし、そうした関わりも、完全な「放任主義」には陥っていないものの、あくまでも消極的な関与であるため、自由主義的な側面が多

分に強いところは否めず、子どもたちの「集団生活」を基盤として、それを発展させていく上で必要になる積極的な指導とは、やはり異質のものであった。

そのような6編と比較して、第2話「くじらとり」では、子どもたち（年長児）の「ごっこ遊び」が取りあげられ、「子ども集団」の持つ力が積極的に描かれた。そこには、1) 一人ひとりの子どもが、遊びへの「意欲」を持ち、イメージ豊かな「想像力」を働かせているだけでなく、必要な知識や技能・技術をきちんと身につけ、それを発揮していること、2) 積木を船体に「見立て」た上で、船長（キャプテン）や運転手・船員という役割分担をして、子どもたちの中で共通のイメージがきちんとつくられていること、3) 船の名前をつける時に、自分たちで話しあい、意見を調整して決めたことなど、いくつかの特徴が見られる。

おわりに

中川李枝子が、保育を学び、みどり保育園に就職して『いやいやえん』を執筆・出版したのは、前述したように、1950年代半ばから1960年代はじめのことである。この時期には、「戦後新教育」での「児童中心」的な自由主義保育が批判され、「保育問題研究会」による「話しあい保育（伝えあい保育）」の実践研究など、集団主義の保育理論も追求されはじめていた。

そうした時代の急激な変化の影響や中川の若さからなのか、あえて『いやいやえん』を「保育理論書」として見た場合、あらゆる思想的な要素が、渾然一体になったものととらえることができる。すなわち、「自己中心的な存在」の幼児をありのままにとらえようとした「まなざし」が示される一方で、戦前の管理的な保育の残滓ともいえるべき「しつけ主義」や遊び中心の「自由主義」を引きずり、そこには、「集団づくり」の成果と見なされる活動も描かれているのである。

そのような混沌とした中に光り輝く子ども観の「斬新さ」が、確かに、「文学作品」としての魅力にはなっている。それは、『いやいやえん』の発表当時に寄せられていた評価とも相通ずるけれど、「生活記録」的なみずみずしさと言えるだろう。しかし、「保育理論書」としては、一部のエピソードを除いて、「集団保育」を論ずる上で欠かせない子どもの「育ち」と指導のあり方の問題、すなわち、「発達論」の弱さが見られることも否定できまい。その課題への対応は、古田足日『ロボット・カミイ』（福音館書店、1970年、原型作品の初出は1967年）など、保育実践から積極的に学んだ幼年文学へ引き継がれていくこととなる。